

こころのバリアフリー 2

外国人にとって
こんな現実があります

Dさんのお話から

子どものいじめが心配です

フィリピン国籍のDさんは日本で
の生活は7年目。日本人男性と結婚
後、出産。その後離婚し、ひとり娘
を引き取り、親子二人暮らしをして
います。Dさんはヘルパーの資格を
取り、高齢者施設で働いていますが、
正式な採用ではないため、生活は不
安定です。

子どものことでは、言葉の壁もあ
り、日本の保護者との交流は難しい
ようです。学校の保護者会では、ど
うしてよいのかドキドキしていると
か。学校からのお便りは、漢字が読
めないため、知人に読んでもらって
いるそうです。フィリピンのお母さ
んたちの集まりでは、子どものいじ
めを心配する声が多いと話していま
した。Dさんが働いている高齢者施
設や近隣のまちには、他にも外国
人の労働者がいます。Dさんと同じよ
うな不安を抱えているのかもしれま
せん。

Dさんのお話を聞いて「なにかで
きることはありますか」そんな一言
を声かけできるといいな〜と思いま
した。



小学生に通訳ボランティア

今年（平成23年）の5月に中国か
らお母さんと日本へ来たEさんは、
全く日本語がわからず小学校に編入
してきました。

Eさんの編入にあたり、市の教育
委員会からの相談で、おこり国際交
流協会の真崎さんは、Eさんの学校
の通訳ボランティアを引き受けられ
ました。週3回程、国語と算数を中
心に授業に参加。Eさんへの配慮と
して学校では先生が毎日一時間、学
習や遊びを通して個別の対応もして
います。Eさんは一学期の音読発表
会にも参加。その時の発表のパート
の言葉は「みんな 遊ぼう」でした。
Eさんはこの言葉をたくさん使って

遊びの仲間を作っていたそうです。

真崎さんはEさんに最初に会った
時の緊張した様子に、言葉の壁がど
れほど子どもを不安にさせているか
実感しました。日本の生活が5か月
（9月現在）になろうとしている今、
Eさんは友だちもでき、日常生活で
は不自由なく日本語が話せるようにな
っています。授業中も積極的に手
を挙げ、意欲的になりました。真崎
さんは、このEさんの成長に感動す
るとともに、ボランティアの喜びを
感じているそうです。



小郡市の外国人登録者状況

平成 23 年 9 月末現在	218 人
・中国	71 人
・フィリピン	58 人
・ネパール	41 人
・韓国・朝鮮	21 人
・その他（15 か国）	27 人

Barrierfree



現在、小郡市に登録されている外国人は、右の表の通りです。日本語を十分に理解できない方も多く、そういう方々は情報が入りにくくて困っています。

また、市内の小中学校にも数人の子どもたちが在籍しています。

おこおり国際交流協会

平成13年設立されたおこおり国際交流協会は、平成23年に10周年を迎えました。国際交流協会は、小郡市における国際活動を通じ、会員相互の親睦と資質の向上を図り、市民意識の高揚と活気のあるまちづくりを目指す民間団体です。次のような活動をしています。

日本語教室

毎週火曜日に午後7時から外国人のための教室を行っています。

国際理解講座

各国の家庭料理教室を開催し、合わせてその国の理解を深める講演会も開催しています。

イベント参加

市民まつりなどで外国料理の店をしています。

交流会

毎年12月にフレンドシップ交流会を開催。10周年を迎えた平成23年には、あわせて10周年記念事業も実施しました。



10周年記念事業風景



暮らしの便利帳



おこおり国際交流協会では小郡に在住の外国人の皆さんが小郡で安心して快適に暮らすために、行政サービスや生活のための様々な情報を掲載した「暮らしの便利帳」を編集・発行しています。

日本語教室をお休みしたり、イベントに参加されない方がいると、一人で悩んでいるのではないかと心配になることがありますね。慣れない生活習慣や言葉の壁、相談役が必要だと感じています。ぜひ、イベントに参加して、知り合いを増やしてください。

おこおり国際交流協会の

山下会長のお話

緊急時（火事、事故・災害など）の連絡先や各種相談窓口からごみの出し方、子育て支援の情報などの生活に密着した内容を掲載。
韓国語・英語・中国語の3か国語訳の3種類。市役所に置いてます。

子どもを登校させることが

できないのですが…

登下校支援ボランティア

親子二人暮らしの子どもが学校で足を骨折してしまいました。担任と養護の先生が保護者に連絡して病院へ。

しかし、次の日から…車もなく、知人も少ない外国人のお母さん一人では、子どもを登校させる手だてがありません。

養護の先生と担任の先生はすぐに、登下校支援をしてくれるボランティアの方に相談。およそ二週間、登下校支援のボランティアさんたちは人を繋いで登下校をサポートしました。

この支援の間、お母さんの表情がともよくなって、親しみを持ってボランティアや先生方に話しかけるようになりました。それは子どももFさんも一緒。「私、大きくなったら、学校の先生になりたいな」と話してくれたFさん、この経験が大人になった時につながりますように！足がよくなったFさんは、「母さんは元気にしているよ」と時々お家の話をしてくれます。

小郡ならではのボランティアの層の厚さを感じました。「困ってます」と声をあげることができ、そしてそれに少しでも手を差し伸べることでできる地域であることを誇りに思います。学校と地域がつながって、実現できた支援ですね。